《２０１７年９月 月例会報告》

＊＊＊

エストニアへ行ってきました

－第 11 回 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム報告－

藤原　亮治（筑波大学附属坂戸高校　教諭）

＊＊＊

【日　時】2017 年 9 月 15 日（金）19 : 05～21 : 10（終了後は近くの中華屋で懇親会　～23 : 30 ごろ）
【会　場】筑波大学附属高校 3F 会議室（〒112-0012　東京都文京区大塚 1-9-1）
【テーマ】エストニアへ行ってきました
－第 11 回国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム報告会
【演　者】藤原亮治（筑波大学附属坂戸高校／第 11 回国際 YF 引率教諭）
【コーディネーター】中塚義実（筑波大学附属高校／NPO 法人サロン 2002 理事長）
【参加者（会員・メンバー）9 名】
安藤裕一（㈱GMSS ヒューマンラボ）、川名紀義（㈱ピージー）、岸卓巨（日本スポーツ振興センター）、嶋崎雅規（国際武道大学）、竹中茂雄（東海道品川宿 FC）、茅野英一（帝京大学）、中塚義実（筑波大学附属高校）、守屋俊英（世田谷区サッカー協会）、吉原尊男
【参加者（未会員）9 名】
内田奈津子（筑波大附属高・保護者）、大林太朗（筑波大学）、斎藤芳（桜丘高校）、塩田伸隆（都立松原高校）、田原淳子（国士舘大学）、登坂大樹（筑波大学附属駒場高校）、藤原亮治（筑波大学附属坂戸高校）、宮崎明世（筑波大学）、守屋佐栄（無職）、
【報告書作成者】藤原亮治

【報告書作成者】藤原亮治
注）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでも コミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するもので はありません。

＜目 次＞

はじめに..... 2
Ⅰ．第 11 回大会へ向けて－準備過程..... 2
Ⅱ．第 11 回大会の概要 7
Ⅲ．ウルヌルメ（エストニア）にて－第 11 回大会の実際..... 8
Ⅳ．ディスカッション..... 21

はじめに（中塚）

１．NPO 法人サロン 2002 と本月例会の概要（中塚）

サロン 2002 は「スポーツを通してのゆたかなくらしづくり」を共通項に集まるコニュニティーである。この名称で活動をはじめて今年が 20 年。ということで、8 月末に 20 周年記念シンポジウムを開催し、懐かしい方や新たに興味を持って下さった方が大勢集まった。

サロン 2002 の中心的な活動である月例会は、今回で通算 254 回目を迎える。今月のテーマは「エストニアへ行ってきましたー第 11 回 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム報告」ということで、今夏、7 名の高校生を引率して現地に行かれた筑波大学附属坂戸高等学校の藤原さんにお話を伺います。

２．参加者自己紹介（各参加者）

全員が自己紹介。サロンへの加入や今回参加の動機などを順に述べた。

東京都でオリンピック教育を実践している小・中学校の教員や高体連関係者、大学教員、あるいは民間企業に務める者や国際 YF 参加者の保護者など、多様であった。

Ⅰ．第 11 回大会へ向けてー準備過程

前々回までは「筑波大学附属高校から 2 名の生徒と 1 名の教員を派遣。筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）が派遣費用を出す」形であった。現地の滞在費は、主催者である国際ピエール・ド・クーベルタン委員会（CIPC）の負担である。

前回（スロバキア国にて開催）からはフルメンバーの 7 名を出せることとなり、どのように選考するか、またこれを機にどのようにオリンピック教育を国内に広げていくかが重要な課題であった。さまざまな組織と協議の上、派遣母体となる日本オリンピックアカデミー（JOA）のユースセッションとして位置付けられた「国内ユースフォーラム」を 2 カ所で開催、その参加者から選考することとなった。2016 年 12 月末に、筑波大学では CORE と NPO 法人サロン 2002 の共催で「クーベルタン-嘉納ユースフォーラム 2016」が開かれ 30 名が参加、中京大学では 23 名が参加し、7 名を選考した。

１．選考対象会

（関東地区）
日本オリンピックアカデミー　第 4 回ユース・セッション in つくば
クーベルタン-嘉納ユースフォーラム 2016
Jigoro Kano Memorial Japan Pierre de Coubertin Youth Forum 2016
【目 的】
1）オリンピック教育：日本の高校生にオリンピック・ムーブメントやオリンピズムを理解させる
2）選考：第 11 回国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムの参加者を選考する
【主 催】特定非営利活動法人日本オリンピックアカデミー（NPO法人JOA）
【共 催】筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）
特定非営利活動法人サロン2002（NPO法人サロン2002）
【期 日】2016年12月23日（金祝）～25日（日）
【会 場】筑波大学、筑波研修センター
【参加校】
筑波大附属高校、筑波大学附属駒場高校、筑波大学附属坂戸高校、帝京高校、自由学園（男女）
計 30 名（男 14、女 16）

（東海地区）
日本オリンピックアカデミー　第 4 回ユース・セッション in 中京
【主 催】特定非営利活動法人日本オリンピックアカデミー（NPO 法人 JOA）
【共 催】中京大学
【後 援】日本オリンピック委員会、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会
【期 日】2016 年 12 月 24 日（金）～26 日（日）
【会 場】中京大学
【参加校】中京大学附属中京高校、至学館高校、日本福祉大学付属高校、椙山女子高校、計 23 名

２．選考と派遣

いずれの会場も 2 泊 3 日の活動全体を通して、主催者、共催者が総合的に評価し選考した。

選考結果は2017年1月31日付で、「特定非営利活動法人日本オリンピックアカデミー　クーベルタン研究部門担当理事　田原淳子」名で、国内ユースフォーラム参加校の学校長あてに書面で通知した。

注）派遣母体は「日本ピエール・ド・クーベルタン委員会（CJPC）」であるが、この組織は「特定非営利活動法人日本オリンピックアカデミー（JOA）クーベルタン研究部門」が兼ねていることから、JOA の公印で選考通知・派遣文書を作成した。

＜派遣生徒（7 名）＞
筑波大学附属高等学校　…　内田 佳菜美（2 年女子）
筑波大学附属駒場高等学校　…　三木 勝輝（2 年男子）
筑波大学附属坂戸高等学校　…　益子 好恵（3 年女子）、伊豆野 竜也（2 年男子）
自由学園（男子部）　…　酒井 大治郎（男子部高等科 3 年）
中京大学附属中京高等学校　…　岩越 麻耶（2 年女）
至学館高等学校　…　木全 解（3 年男子）

＜引率教諭（1 名）＞
筑波大学附属坂戸高等学校　…　藤原 亮治

＜派遣母体＞
日本ピエール・ド・クーベルタン委員会（CJPC）
国士舘大学　…　田原 淳子（CIPC 副会長として参加・日本チームをサポート）
注）CIPC は国際ピエール・ド・クーベルタン委員会。国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムの主催者である。

３．準備会

前回大会同様、2 月ごろから、国際 YF を主催する CIPC から定期的にレターが届き、事前課題や日程などと合わせ、国際 YF の準備状況が把握できた。事前課題等の打ち合わせを生徒が行うにあたり、早期に打ち合わせる必要があったため、まず 4 月 9 日に第 1 回の準備会を開き、今後の展望と準備会の日程について調整の必要性を確認し、各自で進めることと全体で集まって進めることを確認した。筑波大学附属高校で 120 分程度の打ち合わせを行った。

前回大会では 6 月に 2 度、自由学園で準備会を実施している。しかし今回は東海地区からの派遣生徒が 2 名おり（前回は 1 名のみ）、3 か月に 3 度上京するには負担が大きく、高校生の帰宅時間を考慮した場合、午後の限られた時間しか準備できないということに対して改善の必要性を感じていた。

そこで今年度は、筑波大学附属坂戸高等学校の宿泊可能施設において 7 月 15 日～17 日にかけて 2 泊 3 日の合同合宿を開催することとした。開催にあたり、中京地区から内藤智氏（中京大附高教諭）が引率および水泳指導で、CORE 事務局長の真田久氏（筑波大学体育学群長）が特別講義と法被の提供で来校された。またスポーツフォートゥモロー事務局からは交流に必要な物資が提供され、日本オリンピックアカデミーからはオリンピック教本の提供があった。附属坂戸高校のプールの故障に際し、近隣の坂戸中学校の協力や、食事面での飲食店の協力など、多くの協力者のご理解で充実した準備会が開催できたことを付記しておきたい。

１）4 月 9 日（日）
・顔合わせ　…　自己紹介および国際フォーラムへ向けた抱負
・旅程の把握　…　往復のフライトと保険等について業者が説明。渡航費用については各学校で負担
・課題の確認　…　クーベルタン賞をめぐる諸活動と事前課題の確認
・次回集合の確認　…　6～7 月の開催をめどに、後日 E-mail で調整することを確認

２）7 月 15 日（土）～17 日（月）
第11回　国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム日本代表メンバー事前研修
【目的と位置付け】
8月19～26日にエストニア国で開かれる標記フォーラムに日本代表として参加する7名の生徒に対する事前研修を、生徒が属する各学校の教育活動の一環として実施する。
目的と内容は次のとおり。
１）オリンピック教育 :「クーベルタン賞」をめぐる諸活動を中心にオリンピズムの更なる理解に努める。
２）国際交流の準備：日本文化の紹介や、海外の高校生との交流に備える。
３）チームビルディング : 派遣生徒が互いを理解し合い、一つのチームとして機能できるようになる。
【主 催】筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）
【期 日】2017年7月15日（土）～17日（月祝）
※7月15日（土）13：00集合　　7月17日（月祝）16：30　解散予定
【会 場】筑波大学附属坂戸高等学校
〒350-0214　埼玉県坂戸市千代田1-24-1
電話：049-281-1541
【参加者】派遣生徒7名
【指導者】真田　久（CORE事務局長／筑波大学体育専門学群長）
藤原 亮治（第11回国際YF引率教諭／筑波大学附属坂戸高校教諭）
中塚 義実（第8～10回国際YF引率教諭・CORE運営委員／筑波大学附属高校教諭）
内藤　智（中京大学附属中京高校教諭）
登坂 大樹（筑波大学附属駒場高校教諭）

【主な内容】
１）「クーベルタン賞」をめぐる諸活動
・オリンピズム、オリンピック運動についての講義・討議
・スポーツテストへ向けての練習（陸上競技、水泳）
・ポスター制作（Pre-Forum課題）
スポーツの価値を皆が共有し、だれもが主体的に参画することをサポートするポスター

２）国際交流の準備
・ミニエキスポ
・日本チームのパフォーマンス
・海外の高校生へのお土産
３）チームビルディング
宿泊研修を通しての互いの理解

【経費（高校生一人当たり）】

・シーツ代　700円（泊数にかかわらず一律で徴収）
・食費（坂戸高校近隣の食堂を利用）

【プログラムとスケジュール概要】

◆7月15日（土）
13：00　集合（B館3階セミナー室）
13：00～13：30　ガイダンス
13：30～14：30　講義①日本のスポーツと
オリンピック運動
－2020年のホスト国として（真田久）
14：45～16：15　実技①スポーツテスト練習（藤原）
交流棟（宿泊施設）移動
18：30　入浴・夕食
19：30～21：00　出し物準備
23：00　消灯

◆7月16日（日）
6：00　起床・ラジオ体操、早朝ランニング、朝食
8：30～10：00　演習②ポスター制作（製作計画等）
10：10～11：40　買い出し
12：00　昼食
13：00～14：30　買い出し
14：45～16：45　演習②ポスター制作
17：00～18：00　日本旅行による出発再確認
18：30　夕食
19：30～21：00　出し物準備
23：00　消灯

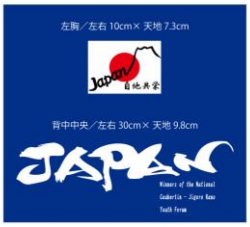
◆7月17日（月）
6：30　起床・早朝ランニング、朝食
8：30～10：00　講義②筆記テストへ向けて
10：15～11：45　実技③水泳（隣接の坂戸中学校プール）
12：00　昼食
13：00～14：30　演習③ポスター制作（or出し物等準備）
14：45～16：15　やり残し課題＆出発までの動き確認
16：30　解散

４．出発までの準備

7 月末の時点で「しなければならないこと」「しておいた方がよいこと」は次のとおり。多岐に及ぶ。準備段階が大変であった。

１）ボランティア活動をして校長先生の証明をいただく
クーベルタン賞にある Community Service。各自が実施し各校の校長先生に説明、実施報告にサイン をいただく。 自治会や施設、スポーツイベントのボランティアなどにそれぞれが取り組んだ。

２）そろいのウェアの用意 ・法被　…　創作演武を披露する際に全員着用。筑波大学のつくば国際スポーツアカデミー（TIAS）より貸与



３）ポロシャツ　…　チームとして統一感を出すために作成。事前合宿でデザインした国旗をモチーフにしたマークを胸に、生徒が全会一致で採択した「侍ブルー」のカラーで製作。マークをもう少し小さくすればよかった。少人数発注のため、少し割高になってしまう。

４）交換するプレゼントの用意
・CORE より　…　嘉納治五郎クリアファイル、東京五輪ピンバッチ
・スポーツ・フォー・トゥモロー・コンソーシアムより　…　ロゴ入りペン、ステッカー、ピンバッチなど

５）保護者会と誓約書　…　CIPC に提出する誓約書を事前合宿で提出

６）“日本代表”派遣のための体制づくり
・派遣母体は、CIPC の下部組織と位置付けられる「日本クーベルタン委員会（CJPC）」。JOA クーベルタン研究部門が兼ねる形であったが、派遣文自体は JOA 名で発行。藤原は JOA からの依頼を受けて引率する形に。

７）宿泊の手配と移動の確認
ヘルシンキでの 2 泊（業者）およびウィーンからスロバキアへのバス移動（CIPC）について連絡調整

８）その他　…　第 11 回大会ウェッブサイト掲載用のプロフィール作成

９）「クーベルタン賞」をめぐる個別学習
筆記試験やスポーツテストへ向けての事前学習、トレーニングは必須。また、英語でのコミュニケーションが中心になるので、英会話スキルの向上を図ることも重要。これらは各自で取り組むしかない。

◆参考：クーベルタンアワード◆

１）Community Service　…　地域貢献活動を事前に行い、校長先生の承認を得る
２）Olympic Knowledge Test　…　オリンピックに関する筆記テスト
３）SportsTests　…　リストアップされたすべての種目に挑戦
４）Arts Performance　…　10 のワークショップから選択
５）Olympic Values　…　事前にポスター作製。現地では 3 つのテーマでグループ討議

Ⅱ．第 11 回大会の概要

【開催地】開催都市：ウルヌルメ（エストニア）
主催校：Ülenurme Gümnaasium

【参加国（ABC 順）】アルゼンチン、オーストラリア、オーストリア、ブラジル、キプロス、チェコ、エストニア、フランス、ドイツ、イギリス、ギリシャ、インド、イタリア、日本、ケニア、マレーシア、モーリシャス、ノルウェー、ポーランド、南アフリカ、スロバキア、スペイン、ウクライナ 23 か国 24 団体。参加生徒 120 名、ボランティア約 30 名

1）Argentina　…　Colegio Padre Ramon De La Quintana
2）Australia　…　Winners of the Australian Coubertin Award
3）Austria I　…　Pierre de Coubertin Bundes-Oberstufenrealgymnasium
4）Austria II　…　Don Bosco-Gymnasium Unterwaltersdorf
5）Brazil　…　Escola de Educação Básica da URI Erechim
6）Cyprus　…　Pagkyprion Gymnasion
7）Czech Republic　…　Gymnázium Pierra de Coubertina Tábor
8）Estonia　…　Ülenurme Gümnaasium
9）France　…　Winners of the Coubertin Pupils' Prize of the region of Burgundy
10）Germany　…　Pierre de Coubertin-Gymnasium Erfurt
11）Great Britain　…　William Brookes School Much Wenlock/England
12）Greece　…　1st Gen. Lyzeum Pierre de Coubertin Pallini (Athens)
13）India　…　St. Xavier School
14）Italy　…　Liceo Statale "Giuliano della Rovere"
15）Japan　…　Winners of the National Coubertin Youth Forum selected by the Japan Pierre de Coubertin Committee
16）Kenya　…　Kipkeino School
17）Malaysia　…　Senior Methodist Girls School Kuala Lumpur
18）Mauritius Island　…　Winners of the National Coubertin Award
19）Norway　…　Gausdal videregående skole Pierre de Coubertin
20）Poland　…　Zespół Szkół w Nekli Gimnazjum i. Polskich Olimpijczyków
21）Republic of South Africa　…　The Hague Primary/Primêr
22）Slovakia　…　Gymnásium Pierra de Coubertina Piešt'any
23）Spain　…　San Juan Bautista – La Salle Corrales
24）Ukraine　…　Secondary school # 142 Dnipro city

【宿泊】ホテルリッヘ　Rehe Hotell
Linnavere tee 3, Tartu, EE61709, Estonia

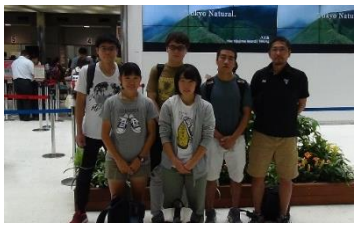
【主な日程】
8 月 17 日（木）　11：00 成田～16：00 ヘルシンキ（約 11 時間）　※時差は 7 時間
8 月 18 日（金）　ヘルシンキ市街地散策、パフォーマンス準備など
8 月 19 日（土）　バスで空港へ～タルトゥ空港～バスに乗り換えウルヌルメへ（３時間）
8 月 20 日（日）　オリンピック史講義、スポーツ博物館、市内観光、開会セレモニー
8 月 21 日（月）　ｱｰﾄﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ①、ディスカッション①、知識テスト、miniEXPO
8 月 22 日（火）　水泳、スポーツテスト、ｱｰﾄﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ②、ﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ②、キャンプファイア
8 月 23 日（水）　選択スポーツ、クロスカントリー、ｱｰﾄﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ③、ﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ③、

アートパフォーマンス発表会
8 月 24 日（木）　国立公園散策、民俗資料館、市街パレードとパフォーマンス
8 月 25 日（金）　アンケート、選択スポーツ、閉会セレモニー、パーティ
8 月 26 日（土）　10:00 ホテル発　、13：00 タルトゥ発（ヘルシンキ乗り換え）
8 月 27 日（日）　８：00 成田空港着（約 11 時間のフライト）、解散

Ⅲ．ウルヌルメ（エストニア）にてー第 11 回大会の実際

第 11 回大会は、エストニアの第 2 の都市タルトゥに隣接する街である Ülenurme で開催された。最終的に 23 か国 24 校が参加した。フルメンバーは 7 名とされているが、各州代表が参加するオーストラリアからは 9 名の参加が認められている。今回は「オブザーバースクール」という名称は用いられず、みなが「クーベルタン・ネットワーク」の一員であるという位置づけであった。初参加はキプロス、モーリシャス、ウクライナで、いずれも生徒 2 名であった。ポーランド、マレーシア、南アフリカ、ウクライナ、スペイン、アルゼンチンが 2 名、イタリアが 5 名とフランスが 3 名だった。引率教員はおなじみの人が半分、初参加が半分といった構成であった。

◆8 月 17 日 （木）



成田空港ロビーに関東組が集合し、保護者に見送られながら搭乗口へ移動、乗り換え待機中の東海ブロック 2 名と合流し機内へ。

調整先のヘルシンキに到着後、現地ガイドが手配したリムジンバスに乗車し、ヘルシンキ中央駅隣接のホテルへ到着。現地時間に合わせて夕食を近くのショッピングセンターで取り、その日は就寝した。

◆8 月 18 日 （金）

【早朝】

時差調整とトレーニングを兼ねてランニングと演武練習を行った。演武の完成が遅くなった影響で十分な個人練習が詰めておらず、この時点では本番に大きな不安のある状況。毎朝 30 分ほど練習をすることを確認し、終了。

【午前】

生徒は現地で必要な文具を買いそろえて、最終打ち合わせをホテルで午前中行った。その間、引率教員はフィンランドオリンピックアカデミーを訪れ、フィンランドにおけるオリンピック教育の状況を委員会の会長からお聞きした。

1952 年のヘルシンキオリンピック開催はあるものの冬季五輪の開催はなく、オリンピック教育にかけられる予算は限られている。その中で、大会開催の有無にかかわらず、委員が毎年地方を巡回し、イベントを開催したり授業を行うなど「草の根」活動を丁寧に実施していた。

【午後】

午後は男子班と女子班に分かれて、現地観光、ショッピングで時差調整を行った。女子班には、この春まで附属坂戸高校に留学していたウィル君が学校の放課後に合流し現地を案内してくれた。夕方に合流して

夕食を取りに店舗を探して歩いた。生徒にすべて一任したが、伝統料理の店舗は少なく、非常に高価であったことや、それぞれの主張をうまく統合できずなかなか店舗が決まらず、1 時間程度四方を探索。最終的にイタリア料理で夕食を済ませ就寝した。

◆8 月 19 日 （土）　フォーラム 0 日目

ヘルシンキから空路でタリンへ。空港では幹事校の先生方が熱烈に歓迎してくださった。バスは定期運航になっており、近時到着の他国の生徒とともに移動。バスで待機中、続々と集まる各国の生徒を前に緊張の面持ちであったが、先に待機していたスロバキアの生徒たちが率先してアイスブレイクダンスを提案し、駐車場で円陣を組んでダンスが始まった。生徒たちはこの積極性に非常に助けられたと話していた。

空港からおよそ 3 時間かけ 180km 南下し、幹事校に到着。到着直後から夕食は各国班に振り分けられ、初対面と食事をするという荒療治に、日本だけでなくすべての国の生徒が比較的苦戦している様子であった。夕食後、ホテルへ移動し就寝。ホテルの部屋は 3 人一組で、同国が一緒にならないように編成されていた。引率教員は 2 人部屋であり、藤原はインドの引率者デニスさんと同室であった。

◆8 月 20 日 （日）　フォーラム 1 日目

【午前】講義 → オリンピックミュージアム見学 → タルトゥ市内観光

起床は 7：00。7：30 には HOTEL を出発し徒歩で学校に向かう。距離にして 3km。なかなか歩きごたえがある。加えてエストニアは 20 度を下回る気温で非常に寒い。朝は秋冬用のアウターなしには外に出るのが厳しいほどであった。そんな中、デニス先生は起床後ゆっくりシャワーを浴びるため、出発がいつも 3～5 分超過してしまう。気にすることなく陽気に歩く彼の姿に、引率者もお国柄を感じたスタートであった。

学校まで 30～40 分。朝食を済ませて、イネス会長の「オリンピック史・オリンピズム」関する講義。生徒以上に教員が熱心に聞き入る姿が、クーベルタンスクールとしての教員の姿勢を感じることができた。

生徒の方はやはり高校生。90 分朝一の講義は、初対面の夜を終えた高校生には厳しいようであった。

講義終了後は、市内のスポーツ博物館とタルトゥ市内散策。エストニアのオリンピック史・スポーツ史をアトラクションを織り交ぜながら展示するバランスの良さに、生徒たちは興味津々に聞き入り、体験していた。市内散策は現地校ボランティアが 4 班に分かれて引率。堂々としたコーディネーションに生徒は大学生（実際は高校 1 年生）だと思い込んでいたようである。調整力・表現力共に自身との違いを認識できたようである。

【午後】　オープニングセレモニー

昼食後、ホテルに戻りオープニングセレモニーに備えて衣装に着替え、国旗をもって学校に集合した。事前のミーティングにおいて「フォーマル」から「トラディショナル」な衣装に設定が変更され、各国が若干困惑したようである。日本チームは今回制服を持たない学校も多かったことから、日本の「フォーマル」をどのように設定するかという事前合宿での議論の末､｢着物｣の疑似衣装として｢浴衣」にたどり着いた。セレモニーでは植樹イベントに三木君が特別に壇上に挙げられ生徒代表として植樹を行うなど、衣装のインパクトは非常に大きなものであった。

セレモニーでは併設の芸術学校の小～高校生たちが伝統音楽・舞踊を披露するなどアットホームな雰囲気で進み､各国が呼名された。日本は全員で｢礼｣をして 自国の文化をアピールした。終了後のミーティングの間中、セレモニーの会場では生徒主催のダンス・パーティが模様され親睦を深めていた。

教員は町長からの歓迎会に参加。オーガニックオードブルがふるまわれ、親交を深めた。

◆8 月 21 日 （月）　フォーラム 2 日目

【午前】ワークショップⅠ　→　パラリンピックスポーツ＆ゲーム

ワークショップは、前回好評であった協働制作が引き継がれ、各国生徒が 9 つのワークショップに分かれ､3 日間の作品作りを行った。それぞれの国の伝統的教授法を見ることができ、引率者としては心躍る時間であった。創作を伴う学習は、生徒同士の心的距離を負荷少なく実現でき、言葉の壁を容易に取り払ってくれる時間となる。本格的活動が始まった最初のプログラムとしては非常に有効であると感じた。

その後体育館に集められ、4 つのグループに分かれパラリンピックスポーツの体験が実施された。そこにはエストニアのオリンピアン・パラリンピアンが招かれ、講師として生徒と共に体を動かした。普段行わないスポーツを意思疎通の未熟な状態で実施することは現状難しい種目もあり、盛り上がりには少し欠けた。プログラムの後半であれば違った反応があったかもしれない。関東組については国内 YF で実施した種目であったことから違和感なく実施できていた。ただコミュニケーションをとってスポーツに親しむという状況までは達することができず、周囲を伺いながら一生懸命頑張るにとどまっていた。

このあと発覚したことだが、前日の夜からの参加となったケニア勢がこの日の午前中のプログラムに参加していないことが発覚。昼前に戻ってきたが、なんと隣町までショッピングに出かけていたとのこと。本人たちは本部から注意を受けたものの悪びれた様子もなくふるまっていた。一番ショックを受けたのは引率教員（ロジャー先生）であり、この後も受難が続く。国民性の違いを共有し、その中でどの程度生徒のセキュリティ管理を行うべきかについて課題を見ることが出来た。

【午後】ディスカッションⅠ　→　筆記テスト

午後はすべての生徒にとって鬼門である「筆記テスト」が実施されることもあり、非常に多くの生徒がそのことを気にするあまり、その前に実施されたディスカッションが形骸化してしまったことが残念であった。このことは教員ミーティングでも指摘された。加えて生徒たちのコミュニケーションが十分でない中で、教員が控室等にいることの問題が共有された。

ディスカッションは各日計 3 回実施された。各回のトピックは以下の通りである。

Discussion Topic 1　　Olympic Values

The core Olympic Values are Excellence, Respect and Friendship. As a group, discuss the following:
In sport, in physical activity, and in life, what might each of the Olympic Values “look” like?
Identify how individuals might best display these values in sport / physical activity.
Discuss the possible influence on other group members if you all displayed these ideals regularly.
Consider what these values might mean for you in aspects of your lives outside of sport.
To conclude the discussion, create a Tree of Olympic Values – each student to write an Olympic Value or message on a leaf which is attached to the tree. This activity can take place all week, as new thoughts come to mind.

Discussion Topic 2　Life Balance

Consider these quotes:
“BALANCE is not something you find – it is something you CREATE”.
Sport and life can often present us with dilemmas. As a young person, these can be very challenging, but you make decisions you believe will best deal with these situations. Good decision-making can minimise risk-taking behaviour.
List the many conflicting pressures on youth –e.g. use of tobacco, alcohol, drugs, corruption, cheating, disrespect, bullying, accepting defeat etc. Discuss how to manage these pressures to create a balanced and happy life.
“Life is like riding a bicycle. To keep your balance, you must keep moving.” Albert Einstein What do you understand is meant by this quote?

Discussion Topic 3　　Sport and Physical Activity – Links to Well-Being

Mental health and social benefits are closely linked to physical health and can be improved by physical activities. This means that sport and physical activities have the power to improve people’s lives, and bring about major improvements to individual and community well-being.
As a group, provide examples of physical activities e.g. sport, dance, gymnastics, walking. Include physical work e.g. building, cleaning, gardening etc. List on chart, board or paper.
Think about the benefits that each of these activities bring to various aspects of physical, psychological and social well-being, and list as many as possible against each activity.

ディスカッション終了後は知識テストが実施された。各国の生徒がこの時に向けて準備を進めていることが宿泊先のロビーの様子などから伺うことが出来た。会場の外では緊張の面持ちの生徒でごった返しており、日本の生徒も例外なく、過去問と初日のレクチャーの内容を何度も見返していた。試験会場は国ごとに机が配置され、各国教員が試験監督を担い実施された。日本の生徒は全員がおおよそ平均点（55 点前後）を獲得し、追試を受けることなく通過することが出来た。試験の点数についてみると、やはりクーベルタンスクールとして長年参加している学校の得点は高く、全員が 80 点オーバーの学校もあった。

今回のフォーラムの傾向として、結果の高さよりもそこに至るプロセスを重視する傾向があり、参加できない、または著しく結果が低いケースを除いて合格が与えられていた。

【 夜 】　ミニエキスポ

事前準備で一番大変だったミニエキスポ。各国が学習デスク 2 つ分のスペースに、各国文化を味わえるブースを設置し交流した。8 割がたの国が食文化。主にお菓子を提供する中、日本は「遊び」をテーマにブースを設置。「独楽」「けん玉」「折り紙」「達磨落とし」を提供した。特に折り紙ワークショップは大盛況であり、ミニエキスポ終了後も折り方を学びにくる参加者が後を絶たなかった。

途中、各国の自己紹介があり、ステージ上でスピーチを行うのだが、筆記試験後の解放感からか生徒が異常に盛り上がってしまい、話が全く聞こえない。これを見かねたオーストラリアの引率教員でクーベルタン委員のお局的存在であるヘレン先生が「シャーラップ!!」の一喝。「このフォーラムの品格を保ちなさい。何を学びに来たの」と生徒たちを叱りつける一幕があった。その後のスピーチは順調に進んだが、各国の話が長いため、隣の人とひそひそ話す姿が

あればすかさずヘレン先生が飛んでいく。肝っ玉母さんはどの国にもいるということを勉強した。このフォーラムには必要な存在でした。

◆8 月 22 日（火）　フォーラム 3 日目

【午前】ワークショップⅡ　→　スイムテスト

ワークショップ 2 日目になると次第に作品も完成に近づく。前日の交流で距離の近づいたメンバー間で細かな意見交換が見られ、徐々に一体感が醸成されてきたように見えた。

身体パフォーマンス系ワークショップでは日本のメンバーの巧緻性が発揮され、どのワークショップでも中心的存在感を言語の壁を越えて示していた。幼少期から様々な運動経験を保証する我が国の体育の充実を示していた。

その後、タルトゥ市の主要大会が開催できるほどのプール施設へバス移動し、スイムテストが実施された。国内選考では時期的に確認できない泳力について、事前合宿の練習で基準をクリアできる生徒が 2 名しかいないことが発覚。50mフリースタイルの半分すら泳げないメンバーが 3 人もおり、今回の日本チームにとってはここが一番の難関であった。事前合宿での確認がもしなければ当事者意識が持てず、クリア出来なかった生徒が複数出たであろう。しかし、事前合宿で全国屈指の強豪校である中京大中京高水泳部顧問の内藤先生が生徒引率兼講師として丁寧にご指導くださり、1 か月間の猶予があったことで一人ひとり大きなスキルアップし本番に望むことが出来た。その結果、皆が完泳し、基準クリアも 4 名が達成できた。

国によってはプール施設がなく、川で独学で泳ぐだけの生徒も多く、そうした生徒には教員のサポートが入り、どのような形であれゴールすることが課せられた。水泳のように身体活動経験が社会環境下に大きく左右されるような種目を、グローバル展開していく今フォーラムで運動課題とすることが適切であるかについても、様々な立場からの意見があった。

【午後】ディスカッションⅡ　→　スポーツテスト

2 回目のディスカッションは、水泳、昼食後と若干難しい状況ではあったが、適時教員が声をかけ活性化を図ったことと、知識テストが終了したことで、主体的に取り組む姿があった。

日本の生徒も何とか食らいついて発言する姿が見られ、英語によるコミュニケーションの心の障壁は取り払うことができたようである。

ディスカッション終了後は、グラウンドに集まってのスポーツテスト。グラウンドは 400m のトラックに安価なゴムが敷き詰められた特徴的なグラウンドであった。男女 2 班に分かれて 100m 走・走り幅跳び・ボール投げが実施された。これらも事前合宿で自身の状態を確認していたのだが、衝撃的だったのはボール投げがシッティングで実施されたことである。これもパラスポーツ体験にかませているのであろうが、事前の条件には記載がなかったため、もともと投動作の経験が少ない生徒は大苦戦であった。全体で機械的に試技が行われ､著しく記録の低い生徒のみ後日追試として｢ローイングテスト｣が実施された。日本チームはケガの影響で 1 名が受けたが無事クリアすることができた。

他国は学校単位での参加のため、全体のレベルは日本の高校生と大きく変わらないが、ギリシャチームだけは全員入れ込み様が強く、全員がそれぞれの専用スパイクを持参していた。ボ―ル投げでは男子生徒 2 名が上位 5 名に、100m 走では 1 名が上位 5 名に入った。

【 夜 】エストニア農業文化博物館＆キャンプファイア

学校から１ｋｍ離れた場所に、農業博物館がある。ばんえい馬並みに大きな馬が放牧された牧場と、エストニアの農業・食文化の歴史資料を拝観した。

そのまま広場でキャンプファイア｡伝統民謡のリズムに乗せて、回る回る。2 時間近く生徒も教員も一緒になって踊り続ける。踊り好きなスロバキアの生徒もさすがに飽きてきた頃にようやく日が暮れる。午後 9 時半。生徒が夜に徘徊することがないよう就寝時間ぎりぎりまでプログラムを入れ込んでいるということらしい。

◆8 月 23 日 （水）　　フォーラム 4 日目

【午前】ディスカッションⅢ　→　スポーツ交流

雲行きが悪く、午後のクロスカントリーまで持つかどうか懸念された早朝。生徒も徐々に疲労の様子が見て取れ、朝の足取りは重かった（教員も、連日の 2 部 MTG により足取りは生徒以上に…）。

ディスカッションはスムーズに進行したようである。終盤を迎え、グループに進行役・記録など主体的に買って出る生徒が生まれていた。

午前中一時的に天候が回復し、各会場に分かれてのスポーツ交流の前に綱引き大会が開催された。

男女各 2 グループのうち勝者は教員との対戦権利が与えられた。

レディファーストの国々が多いのか、女子との対戦はなぜか敗退にもかかわらず男子には完勝。本気で取り組んでいた私は一体…。

スポーツ交流はサッカー・バスケットボール・卓球・エアロビクス・サーキット・ウェイトトレーニングなど多岐にわたり、生徒は 1 つを選択し、思い思いに時間を楽しんでいた。

【午後】アートワークショップⅢ　→　クロスカントリー

この日は身体的に非常に厳しい一日となる。丸一日動き続けることが求められる。

午後のワークショップは、夜の発表会に向けた最後の仕上げである。本番さながら、何度も通し稽古が行われた。ショーダンス担当の生徒は 1 時間以上はねっぱなし。終了時には太ももがガクガクの状態で「走れる気がしない」と弱気を漏らしていた。

ワークショップ終了後は、ホテル近くのフライングゴルフ場を活用したクロスカントリー。男子が 3km、女子が 2km となる。距離は問題ないが、グラウンドコンディションは最悪であった。雨がどんどん強くなり、林に覆われたコース影しかない。足場は枯れ木の粗いチップが不均一に敷き詰められ、チップの大きさもまちまち。かつ水を含んで柔らかい。砂浜を走るような感覚に襲われる。これは正直きつい。加えて朝から動き詰めである。正直嫌な予感がした。そしてそれは当たる。筋力が弱い、疲労で集中を保てない女子生徒の何人もが、足を取られ捻挫で脱落するという悲劇である。大粒の涙をこぼしながら、肩を担がれ引率教員とスタート地点に戻る姿は痛々しかった。

今回のプログラムはプライベートな時間の確保がないうえ拘束時間が長い。生徒によっては楽しさの裏にこうしたストレスを抱え十分な休息を得られない生徒もいるようであった。(特にフランスチームはナーバスになっていた)。これについては夜のミーティングでも議論となった。

生徒の成績はというと、なんと女子の一人が全体のトップという成果を残した。残りの生徒も条件を考慮すれば国内予選よりも良い記録でゴー

ルしたといえる。事前準備から意識してきた「スタミナ」について各々が最低限の準備をしてきたことが大きい。

【 夜 】ワークショップ発表会

夜はアートワークショップの成果発表会が実施された。今回開催されたワークショップは以下のとおりである（日本チームが参加したワークショップは☆印で示す）

バーナー作成☆

影絵☆

ソング＆
ボディーパーカッション☆

エストニアンフォークダンス☆

ショーダンス☆

ソング＆リズム

クラフト製作

リズムダンス☆

モダンダンス

教員出し物

全体的に非常に高い完成度の演技を披露した。また会場が、それぞれのパフォーマンスを引き出せるよう雰囲気を作り、大きな一体感のある発表会になった。ここまでの盛り上がりはこれまでにも見られなかったと、常連の引率教員が口々に発していた。生徒自身が主体性をもってクオリティをあげていこうとする姿勢が高かった点は、各講師陣も口をそろえて話していた。またその講師陣が非常にファシリテートうまく、生徒一人ひとりと良好なコミュニケーションが取れていたことも大きな要因であろう。

生徒に触発され、生徒のディスカッションの裏で教員のワークショップが開催された。ソング＆ダンスをテーマに「La Bamba」「imagine」を合唱し、発表会でも披露した。教員には多彩なものが多く、ドラム、ピアノ、ギターを弾くもの踊るものなど多様な人材がコラボし非常に充実した時間を共有できた。こうした教員の協働性の高さもフォーラムを盛り上げた一つの要因になっていたのかもしれない。

◆8 月 24 日 （木）　フォーラム 5 日目

【午前】ショッピング　→　民族工芸博物館

本来は国立公園で 1 日過ごす予定になっていたが、午前中の悪天候の予報に急遽予定を変更してタルトゥ市のショッピングモールへ向かうことに。生徒は前日の連絡時に大歓声が上がる。

1 時間ほど各々で時間を使い、エストニア民族博物館へ。ここではアコーディオン演奏に乗せた民族歌謡を気持ちよく草原の中でという予定であった。しかし前日の予報通り雨脚が強く、狭い室内のなかでの演奏となり、120 名が押し詰められ、演奏を楽しむどころではなかった。

演奏を聞き終えた後にエストニアの伝統食をいただいた。カボチャやチーズの練り物にミルクをかけたり、ドライフルーツのケーキがふるまわれた。低い気温に雨と非常に厳しいコンディションのなかで、冷たいミルクスープが逆の意味で骨身に染みた。

【午後・夜】市内パレード　→　各国パフォーマンス

いったんホテルに戻った後、各国がパレードとパフォーマンスの準備に追われた。

初日に観光で訪れたタルトゥ市中心街を練り歩く。生バンドを乗せたトラックを先頭に、幹事校がアートワークショップで作成したバーナーを掲げ､その後を国別で行進｡日本は法被を着て参加した。

ショッピングを楽しむ市民も興味津々でパレードの後をついて中央広場へ終結。ランダムに司会者が各国を紹介し、囲まれた広場の中央でパフォーマンスを演じた。それぞれの国特有の音楽・特有の動きに、フォーラム参加者と市民が一体となって鑑賞、ところどころは中に入って踊るような状況が随所にあった。日本は創作演武を披露。毎朝 30 分前に起床し、ようやくきちんと踊れるところまでたどり着いていたが、正直どこまで美しさを演出できるかは半々といったところであった。幻想的な音楽に乗って、生徒の表情ががらりと変わり、一つひとつの動きを大切に踊りきることが出来た。日本独特の世界観を、エストニア市民およびフォーラム参加者にしっかりと伝えることが出来た。観客からは「アメージング」「ベリートラディショナル」といった称賛を、一般客を含めた多くの方から聞くことが出来た。起床時間を合わせられず、むつかしい雰囲気になったこともあるが、本番を踊り終え

てほっとした表情と満足感・高揚感でいっぱいになっていたようである。

前述したケニアのロジャーさんの悲劇はここでも起きる。まず、今回のパレード用に準備した黒の衣装を生徒が一人も着用してこなかった。これにはロジャーさんも怒り心頭な面持ちで生徒と話していたが、生徒自身はあまり気に留めていないようであった。そして極めつけは、各国のパフォーマンスにおいて、ケニアが呼名されることなく終了してしまったのだ。誰もそのことに気づかず、解散後に指摘があった。ロジャーさんにとって踏んだり蹴ったりの一日であっただろう。

◆8 月 25 日 （金）　フォーラム 6 日目

【午前】スポーツ交流　→　追試

いよいよ最終日。この日は前日が嘘のように晴れ渡り、好天に恵まれた。

まず生徒はフォーラムに関するアンケート実施後、成績不良者に対して追試が行われた。日本からは 100m と幅跳びで振るわなかった男子生徒が 1 名、ローイングマシンの追試を課せられた。結果は良好で無事パスすることができた。それ以外の生徒は各々にスポーツ交流を楽しんだ。

教員は生徒のアンケートを回収後、教員の今フォーラムの反省会を実施した。主に議題に上がったのは

① フォーラムの日程がタイトではなかったか。
　フランスの生徒は一時期非常にナーバスになっていたようだ。部屋間の行き来もあり落ち着かなかったようである。

② 水泳をアワード対象とすることを今後どのようにしていくべきか。

水泳は宗教上の問題や、学習環境の違いが顕著に表れ、これを項目にすることは今後難しいのではないかという意見も多き出る一方、これまで続けてきたものを簡単に変更することはこのフォーラムの価値に影響するのでないかといった意見もあった。今回はサポート付でも 50m を泳げば合格をだしたようであるが、検討されるべき議題である。

③ アワードの選考基準の適正値をどのように設定するのか。

昨年に比べてスポーツの基準値が非常に緩やかになったようだ。気象条件等も考慮しているのであろうが、どちらかというとこのアワードの受賞に向け、最低限の準備をしてきていると認められる者には基本的にアワードが送られるということであった。これについてもこの賞の権威を守るために基準の厳格化を唱える先生も中にはいた。

国・学校といった派遣選考スケールの異なる団体、さらに文化的背景や学校理念・環境の異なる者同士による議論であるため、なかなか納得解が得られるものではない。委員会としては、目標がオリンピズムの世界への浸透とそれを根幹とした教育の普及であることから、より広く参加を募りたい一方、ヨーロッパを中心に展開してきた活動の中で、他国、他地域の非クーベルタン・スクールの台頭について、スクール認証の価値も含めて危機感を覚える教員もいたことは確かである。しかし、このフォーラムにこれだけ多様な生徒が一同に会する機会の価値は、計り知れないほど大きいという認識の一致を確認することができ、それぞれの立場を尊重し、フォーラムをよりよいものにしていこうという方向性はみな同じであることが共有できた。

【午後】　フリータイム　→　クロージングセレモニー

クロージングセレモニーのための準備でいったんホテルへ帰る者など、午後の 2 時間ほど自由な時間が設定された。

夕刻から開催されたクロージングセレモニーでは、ディスカッションで話し合われた内容が代表生徒によって紹介され、その後、この期間中の出来事を振り返る映像が流された。

その後、各国が終了証と、アワード受賞者にはメダルが授与された。日本チームは無事全員がアワードを獲得することが出来た。国によってメダルの授与に大きな差が出ているようであった。特にインドは参加 5 名中受賞者 1 名であった。水泳と筆記試験が大きく影響したようである。また、クロスカントリーやスポーツテスト時の怪我の影響が大きかった生徒も受賞できていないようだが、今回は 9 割近くの生徒がクーベルタン賞を受賞した。その後ボランティア、幹事校スタッフなどへ謝辞と記念品が贈呈され、最後にアートワークショップで素晴らしいパフォーマンスを示したグループが再登場し、クロージングセレモニーを盛り上げた。その中で、幹事校のダンスの教員であり、今回エストニアンダンスを指導したマリ先生から三木君が呼名され、ワークショップで素晴らしい成長と成果を上げた生徒として個人的に紹介され、記念品が渡されるというサプライズがあった。本人も非常に喜んでいた。

【 夜 】

クロージングセレモニー後は生徒・教員別々にお別れの会が実施された。生徒はとにかく時間が許す限りダンスパーティーを楽しんだようである。教員はタルトゥ市外の大きなパブが予約されており、生演奏の中でダンスや歌を楽しんだ。幹事校の先生方と引率教員で、やはり過ごした場所が違うことから最後もなかなか混ざりえなかったのが残念であった。

私はというと、苦手の英語が災いし、USB 紛失騒動に巻き込まれたが、最終的には誤解であること

が判明し、南アフリカとアルゼンチンの女性の先生に大爆笑されてしまった。

途中ケニアとウクライナが夜中の便で出発するため席を立った。今回の滞在について日本のようなフォーラム 0 日スタートが大半であったが、中にはもう 1 日前に到着しているグループもあり、帰りも同様に 1 日後に帰る生徒もいたようである。このあたりの費用についてはどこが捻出しているのか。該当国はクーベルタン委員会であると話していた。

◆8 月 26 日 （土）　フォーラム終了翌日

朝からそれぞれの帰路の時程の近いものが送迎バスに乗り、Ülenurme を発った。朝から多くのものがロビーに集合し別れを惜しんだ。誰か一人が泣き始めるとそれに呼応するかのように皆が泣き始め、収拾が困難な状況に陥るほどであった。あまりの状態に出発が遅れ気味になったところで、これまたオーストラリアのヘレンさんが皆を大声で叱責しようとするも、今回ばかりは収まらず、各教員が総出で収束に動いたほどであった。これから先、多くの者が直接顔を突き合わせることはできないであろうという確信と、この約 1 週間、どれほどの濃密な時間を共有してきたかという感情が一気に噴き出したようであった。

◆8 月 27 日 （日）　フォーラム終了翌々日

早朝無事に成田空港に到着した…と言いたかったが、乗り換え時に男子一名が発行された航空券を誤って捨ててしまったことで一時右往左往した。結果、それがなくとも発行することは可能であったのだが、なかなか肝を冷やした出来事であった。

空港には保護者の方々や引率の先生が出迎えてくれ、田原先生から総括をいただいて解散した。誰も体調を崩さず帰国できたことが一番の成果であったように思う。

◆雑感

今フォーラムの課題は、多様な生徒の学びをどのように認めるのか。ここが焦点になっていたように思う。交流自体は非常に豊かなものであり、生徒の成長とかけがえのない仲間を獲得ができる貴重な経験が保証される。日本の学生もこの 7 日間で見違えるほど成長した。帰り際には誰もが涙するフ

ォーラムなど経験できるものではない。

一方で、フォーラム自体が学校単位で参加している国が多い中、学習の一つの成果として位置付けた場合、各校でその思いは異なる面もある。まして、選抜参加した非クーベルタンスクールとの意識差は教員間にも存在していた。だからこそ、今フォーラムの重要性が再確認できるわけなのだが、次の大会以降、そうした参加校教員・組織間の今フォーラムの価値の再確認と共有することで、さらに大きな価値を生み出すフォーラムになると確信した。

2020 年直後は日本での開催が期待されている。これまでの嘉納イズムがしみ込んだ日本の教育の価値の再確認と再出発を可能にするためにも、認知を拡大していける＝ムーブメントをおこせる仕掛けを期待したい。

Ⅳ．ディスカッション

中塚：質疑応答の前に、主催者側の副会長として参加された田原先生から補足をいただければ。

田原：生徒さんを送っていただいた学校の先生方、本当にありがとうございました。個人のバックグラウンドを見るとそれぞれに国際経験を有する生徒さんも少なくなかったように思います。現地でもやはり抵抗なくいろんな国の人たちと話をしたり、一緒に活動したりが自然とできているようだったので本当に頼もしく思いました。パフォーマンスの評価も非常に高く、他国のものよりはるかに多くの拍手が日本チームに与えられていました。

国際クーベルタン委員会スタッフの中の話では、ここまでとまた違う、新しい成功の段階に入ったという声が聞かれました。場所の要因や 1 週間まるまるのプログラムですが、スタート早々から盛り上がりのボルテージが高く、アクションに対するリアクションの感度もいつもよりも早く高まったように感じました。良い仲間づくりが早くから進みましだ。こうした国際的なイベントの意味は、個々の国際経験とは違って、5 大陸 23 か国から集まってきた仲間と同じ時間を共有することによって、様々な違い（学習・生育・文化など）を知ることです。その中で互いに折り合いをつけながら、うまくいかなかったりすることがあっても周囲と話をしながら進め、各々異なる価値基準を有する者同士で乗り越えていく体験をしたと思います。これがクーベルタンの思想のひとつであり、違う人々と出会うことで、テレビやインターネットを通しての出会いとは違う直接体験として、違いを感じ、理解しあい、ベストを尽くし、より良いものを作っていけるかというチャレンジの場としての 1 週間であったと思います。日本の生徒は見事にそれをやり遂げてくれたと思います。そしてこれが生涯の宝物になってくれたらと思います。今後、国内でこうした活動をどのように展開していくかを考えていくことが私たちの課題になりますが、そのあたりについて率直な意見や感想をお聞かせいただければと思います。

中塚：それでは自由に話をしていきましょう。

登坂：アワードの採点方法とアワード自体についてお聞かせ願いたい。全体の写真を見せてほしい。

中塚：アワードの中身は毎回決まっていますよね

田原：そうですね。基本的には変わっていません（前述参照）。それに開催国特有の種目が加わることがあります。例えば中国では太極拳が実施されました。スポーツは 5 種目。あとは知識テスト、ワークショップの参加状況（途中ケニアのように抜けるなどはペナルティ）、事前ボランティア活動、グループディスカッションの参加状況、そうしたチェック項目があり、点数化できるものは点数化します。それぞれに基準値があり、その基準値を 2 つ落とすとメダルがもらえない。修了証は全員もらえます。しかし主催者側が大切にしていることは生徒が自分なりにベストを尽くすことです。

登坂：三木がもらってきたが、全員がもらえるといっていたが。

田原：クーベルタンメダル（アワード）がもらえるのは全員ではありません。

藤原：インドは 5 人参加したが 1 人しかもらえなかった。

中塚：インドは初参加だったのですね。

田原：そうです。新しく加わりました。

中塚：インドはクーベルタンスクールなのですか？

田原：まだそうではないと思います。今回はオブザーバー参加ですが、かなり熱意があり、近い将来正規参加になるのではないかと思います。

参加者：主催者はどこですか。

田原：国際ピエール・ド・クーベルタン委員会です。

参加者：財源は？

田原：ほとんどが IOC からの助成です。

参加者：中国で開催したことがあるとあったが、今回参加していないのはなぜか。参加する基準はあるのか。

田原：基本的にはクーベルタンスクールが参加します。登録されているクーベルタンスクールへの招待という形で行っています。

参加者：アメリカがいませんね。

田原：はい。アメリカ大陸からはブラジルとアルゼンチンが参加しました。アメリカにはクーベルタンスクールがありません。

中塚：そこが不思議というか、面白い。なぜ広がっていかないのか。

登坂：ボール投げの重さは？　学校で練習したのが砲丸投げだったのだが（周囲笑）

藤原：男子が 250g、女子が 150g。

中塚：事前情報にボールの重さは書いてあったが、どのように投げるかまでは記載がなかった。

藤原：そうです。イメージしていたのは当初ソフトボール投げであった。砲丸投げの練習で鍛えられて高記録につながったのでは？（周囲笑）

田原：大きさとして、今回はテニスボールくらいの大きさでした。ただこれも毎回同じではありません。ですので次回はまた全然違う様式になるかもしれません。

中塚：前回はバスケットボールの壁当てでした。つまりスポーツテストの中身として、走・跳・投はある。このほかに水泳とクロスカントリーがある。

参加者：法被に TIAS とあったがあれは何の略か？
大林：あれは筑波大学にある修士課程プログラムの略称です。法被は「つくば国際スポーツアカデミー」の所有物で、今回要請を受け、そこから貸し出した。

守屋さ:このフォーラムと全く関係ないが、日没はいつか？キャンプファイヤーがとても明るかった。

藤原：だいたい 8 時半から 9 時。キャンプファイヤーが終了したのも 9 時過ぎだった。

大林：レクチャーは英語とフランス語が用意されていたが、フランス語しかしゃべれない生徒もいるのか。

田原：基本的にフランスはフランス語しかしゃべれない生徒が多いです。あとはアフリカのモーリシャス。少数ですがいます。

大林：交流は大丈夫だったのか。

藤原：英語が全くダメという生徒はいなかった。日本の生徒の印象として、前回大会までの情報にくらべかなり話すことができる生徒が多く、自分たちが当初気圧された感があった。しかし交流を進める中で、フランスの生徒も同様に英語が苦手だということを共有し、急速に仲が良くなったようである。

中塚：今回少人数だったところは？

藤原・田原：モーリシャス・マレーシア・南アフリカ・フランス・ブラジルやアルゼンチンはまだオブザーバー参加。今回ケニアがフルメンバーで参加した。

中塚：そしてどっかに行っちゃった（笑）。引率のロジャーさんが連れて行ったのか？

田原：いや、知らない間に勝手に行ってしまったようです。

藤原：ロジャー先生はそれを知ったあと、半日以上うつむき加減で悲しそうであった。

田原：もう招待してもらえないのではないかと心配していました（周辺笑）

中塚：これまでにも似たようなことは何度か起きている。問題が多いのはギリシャの生徒であった。

田原：今回ギリシャはそのようなことは起こしていませんでした。

参加者：生徒同士で恋愛のようなことは起きないのか。

藤原：異国間にあったかは分からないが、メンバー内でそうした雰囲気を漂わせているものはいた。年頃なので仕方ない。ただ、そのような中で不測の事態が起きないよう、幹事校の先生が中心に見回っていた。

中塚：同室の教員は？

藤原：私はインドの先生だった。私自身英語がダメなので、その中でコミュニケーションをとれるようリードしてくれ、非常にたすかった。ワークショップにおいて教員の出し物をする際も、率先してアイデアを提供してくれた。

中塚：約 50 名の生徒から選抜した。これをもっと全国展開していきたい。選ぶのが目的でなく国内の YF をつくり、オリンピズムを高校生に広げていける仕組みができないかと考えている。ただどこがリーダーシップをとるのかについて色々課題がある。全国高体連研究部活性化委員会では、高体連は競技ばかりでなく､こうした活動にも目を向けていくべきだという話をしているところである。活性化委員会でともに議論している塩田さん、いかがですか。

塩田：質問をよろしいですか。プログラムの中で最終日の路上パフォーマンスに向けどれほど練習したのか。また、そのなかでクリエイティブな出し物として日本らしさをどのように演出したのか。衣装だけでなく動きの中にも応援団のような伝統的なものを盛り込んだように感じました。東京オリンピックにおいてもそうした日本らしさの演出は様々な場面で要求されると思いますが、生徒はどれほどの製作時間をかけて仕上げたのでしょうか。

藤原：製作開始が 7 月の合宿から、筑波大学附属坂戸で集合した際にスタートした。期間は 1 ヵ月。実質演技の内容の完成が 8 月上旬。合宿の 3 日間では到底決めきれず、LINE などで動きを撮影し、共有しながら進めた。創作経験自体乏しいので、必要なサポートに私が入った。参考にしたのが、高校生が体育祭などで行う応援演武を基礎に、日本特有の動き（空手・歌舞伎・相撲）を散りばめることを共有して進めた。動きを完成し渡航までの 10 日間の中で自主練習した。家の中でかなり音を立てて迷惑をかけたのではと思う。渡航後はフィンランドで動き合わせを行い、フォーラム期間中の朝練習で精度をあげていった。

田原：国によっては準備も役割分担をしているところもあるようです。スロバキアは知識テストのところはスロバキアオリンピック委員会が講習等を請け負っているそうです。今回のダンスなども、中京大にダンスの先生がいるのでそうしたところに協力を依頼することも一案だと思います。

藤原：国内 YF の中にそうした課題が課せられ、それを国際 YF でも披露すれば負担は減るのかもしれない。

田原：国内 YF とのつながりが増えれば負担の削減になるでしょう。

藤原：ただ、生徒が作るという行為そのものの学習効果は非常に大きい点も考慮すべきと考える。
プログラム自体、非常にボリュームがあるので、きつかったという事実はある。

田原：生徒さんの中には（日本の出し物が終わったら）「これで朝練から解放される～」と言っていた人もいました（笑）。内田さんのお子さんはいかがでしたか。大活躍でした。

内田：事前からダンスの練習もかなりスマホを見ながら行って大変そうであった。ディスカッション内容は事前に知らされており、これほど量があることを理解していなかったと驚いていた。子供の感想として「すごく疲れたけれど、すごく楽しくていい経験になった」。同室がスロバキアの人でつたない英語でも伝わり、テンションや時間の感覚などを身にしみて感じて帰ってきたようだ。

中塚：女性のお子様なのできちんと家庭で情報を共有するのですね。やはり（周辺笑）。

内田：いいところはよく話してくれる（笑）ただディスカッションの内容はと聞くとしゃべらなかった。

中塚：この場で男性のお子さんの保護者の方も来られるとよかったですね。おそらくほとんど話していないと予想できる（笑）

藤原：男子も最初は様子を見ていたが、終わりには非常に大胆に行動できるようになっていた。帰りの空港ではイタリア人のおじさんに話しかけられ、その場で facebook でつながるなど、一皮以上剥けた感じがした。フォーラムのかかわり方についてもメンバーそれぞれ、考え方が違う。例えば三木君はどんどん外に発信し、認知してもらう。伊豆野君はヨーロッパ中心の側面を強く感じるからこそアジアの人と積極的にコミュニケーションをとり、フォーラムでの存在感を示したい。酒井君は自分からはいかないが来たものはすべてウェルカムな姿勢で丁寧に対応するなど、自身の考え方をきちんと言語化し、アクションを起こせるところまで、それぞれの持ち味にさらに磨きをかけることができたフォーラムになったと思う。

中塚：そのほかありますか？よろしいでしょうか。
このような感じでフォーラムは続いてきています。次回はフランスでの開催が決定していて、そのあとのオリンピックが東京で開催されることから、ぜひパリの後は日本で開催できるように皆さんと協力していきたいと思う。そのときには今回参加したメンバーもスタッフとして協力してくれればなと考えています。以上でサロン月例会を終了します（拍手）

以上